

# ハスカップ 専門家が語る



ハスカップについて3人が語った座談会

## 苦小牧で座談会 分布、品種改良など解説

勇払原野を象徴するハスカップについての座談会「ハスカップを語ろう」が20日、苫小牧市美術博物館で開催された。

同館で開催中の企画展に合わせた関連行事で、研究者とNPO関係者、生産者の3人が「調べる」「守る」「育て食べる」の観点から、ハスカップについて語り合った。約30人の市民からは質問やハスカップの思い出が寄せられた。

星野洋一郎・北海道大生物生産研究農場准教授は、植物学の立場から道内と世界のハスカップの分布状況などを解説した。道内では最大の自生地である勇払原野のほか、釧路・根室地方

の湿原、日高山脈、大雪山、道南などの山地にも自生していることや、染色体の比較研究の結果では釧路湿原のハスカップが、ほかの地域と比べてより古いグループとみられることを指摘。

「勇払原野のハスカップがどこから来て、なぜ大群落を作ることができたのかなどは今後の研究課題」と話した。

どは今後の研究課題」と話した。NPO法人「苫東環境コモンズ」の草薙健事務局長は、苫小牧東部地域の群生地がハンノキなどの森に変わってきている現状を、無人機で撮影した動画や航空写真を使って紹介した。生産者の立場から語ったのは厚真町の山口善紀・山口農園代表。品種改良に取り組んできた経緯などを語り、4年前に厚真町がハスカップの栽培面積で日本一となったことや、ケーキなどの新商品に消費が増えていることを説明。「高品質の実を安定生産し、本州にも流通させたい」と話した。

読売新聞  
2016. 02. 23